

博士論文執筆経験談

大学院所属 健康・スポーツ教育講座

現職 東京学芸大学 健康・スポーツ科学講座 准教授 **鈴木 聡**

1. 大学院生として学んだこと

大学院を修了して5年が過ぎようとしています。在籍していた3年を振り返ると、かけがえのない学びの場でした。小学校教員をしながらの論文執筆は、正直なところ辛いことの方が多かったです。しかし、そのおかげで現在、母校で教員養成に関わり、好きな研究を続けることができています。やり抜いて良かったと思います。

私にとって大学院での学びは「概念崩し」の連続でした。教職に就いて20年近くたち、教師としてのスタイルが固まりつつあったときに再び学問を学んだことで、大きな「揺さぶり」を受けました。まず、「実践報告や紀要論文」と「学術論文」の違いを認識しました。また、論理的にものを書くことの本質や多くの理論を学び直しました。おそらく学部時代に学んだ内容も多々あったと思いますが、実践者としての経験があったからこそ、「なるほど」と思うことが多かったのかもしれない。とにかく本や論文をたくさん読み、知が増え、ものを考える「快」を改めて感じました。そして何より、大学院時代の師である松田恵示先生のご指導は大変刺激的でした。統計法、インタビュー法、ライフヒストリー、グランデッドセオリーアプローチなど様々な研究方法を身に付けることができました。さらに、ものの見方、考え方、世の中の現象を様々な理論を援用して解釈していく面白さを教えていただきました。このことで自身の研究の幅も広がったと思いますし、現在ゼミ生一人ひとりの研究テーマに沿った研究方法や解釈の仕方をアドバイスしたり指導したりする際に大変役に立っています。「見たいもの」があるとき「見るための物差し」をいくつか持っていることは強みです。

2. 教師と院生の両立

在籍時代は、学級経営、学年経営、そして校内研究を推進しながら自身の研究を進め、論文を書くという毎日でした。早朝から18時までは教師として子どもと学校のためにがんばり、19時から0時までは大学院生になって研究するという生活でした。人生で一番勉強した時期です。しかし、自身が教師であるだけでなく学び手であったということが、当時の教育活動にとて

も生きていたと思います。論文指導を受けるゼミでは自分の力不足を情けなく思い、帰路の中央線車窓からネオンがにじんで見える日もありました。しかし翌朝は、笑顔で子どもたちを迎えます。研究から逃げたいと思うこともありましたが、毎日気持ちの切り替えができていたから、崩れずに頑張れたのかもしれない。

3. 執筆にあたって

実際の執筆に当たっては、学会発表がよいアクセントになっていました。所属していた研究室は、年に数回の学会発表が課されていました。時間との戦いでしたが、そのために研究を重ねていくことが実現していました。本来は、研究をしてその成果を発表する、というのが筋でしょうが、私は学会発表を小さいゴールに設定しながら、それに向けて研究し、発表するというサイクルで走り続けることができました。2年次末の中間審査を終え、3年次からいよいよ本体を作っていく作業を開始しました。並行して投稿論文の修正作業もありました。ここから提出までの日々は、本当に辛いものでした。気分転換や息抜きが必要だという思いもありましたが、教育活動と机に向かう連続でそうしている時間が全くありませんでした。むしろそれくらい没入していたのかもしれない。

4. 博論を書き終えて

博士論文を書く道のりは、人それぞれだと思います。おかれている環境や立場も様々ですし、研究分野によっても違うはずですが、それぞれに共通することは、「初志貫徹」という言葉につきると思います。「学位取得はゴールではありません。『研究者として独り立ちして良い』というスタートラインです」

学部時代からの恩師であり当時の研究科長だった岸学先生の言葉です。今でも強く心に残っています。

大学院で研究をしてきたこと、論文を書いたことは、振り返ってみてやはり愉しかったと思います。この過程で自分が大きく変容することができました。ぜひスタートラインをめざして頑張ってください。私も初心を忘れずに研究を続け、論文を書き続けます。ともに頑張りましょう。